

# ごっこ遊びにおける養育者の関与

居關 友里子 (国立国語研究所) †

小磯 花絵 (国立国語研究所)

## A Case Study Focusing on Caregiver Engagement in Pretend Play

Yuriko Iseki (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Hanae Koiso (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

### 要旨

「ごっこ遊び」は子どもの言語やコミュニケーション能力の発達を促す機会であるとともに、子どもが好んで行う遊びの一つである。家庭でごっこ遊びが行われる際、しばしば養育者がこれに参加し、子どもがごっこ遊びを組み立てそれを進行させる活動を援助している。本研究では、このごっこ遊びに養育者がどのように関わっているのかについて明らかにするために、国立国語研究所で構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』に格納予定である幼児と養育者の会話データについて質的分析を行った。データ中のごっこ遊びのやり取りでは、子どもによって今、何がごっこ遊びの中で行われているのかを見えやすい形にしたり、いくつかの方法を使い分けながら続く展開を促すといった養育者の振る舞いが観察された。現在の状況を参照しながらごっこ遊びの展開に利用可能な資源を差し出すことで、遊びの発展を補助していたといえる。

### 1. はじめに

ごっこ遊びは、幼児期に特に好んで行われる遊びの一つである。ここでは、生活の中での体験をふりとして遊びの中に取り込む際に必要となる象徴機能の発達に加え、ごっこ遊びの参加者間で設定を共有し合いやり取りを進行する必要があるという性質から、社会的なコミュニケーション能力も必要とされる (高橋 1989, 石川 2021 ほか)。ごっこ遊びはこれらの能力の発達の目安として重要視されるとともに、これらの能力を育む場として研究者の注目を集めてきたといえる。

このようなごっこ遊びにおける関心ごとの一つに、大人の関与のあり方が挙げられる。ごっこ遊びは大人の活動の影響を受けながら進行し発達するものであるとされ、ここに大人がどのように関わり、遊びや子どもにどのような影響を与えていくのかを明らかにする必要があるとされる (ヴィゴツキー 1989, 高濱 1993)。そこで本研究は、養育者が実際にごっこ遊びの中にどのように関わっているのかについて明らかにすることを目的とし、子どもの普段の生活を収録したデータを用い、この中に生じていたごっこ遊びの実際のやり取りについて質的分析を行う。ここで養育者がごっこ遊びにどのように関わり、それによって何が可能になっているのか、また養育者の関わりを受けて子どもたちはその後のごっこ遊びをどのように組織していくのかについて注目し、やり取りを記述していく。

### 2. 先行研究

ごっこ遊び、またそれに相当する遊びを指す語としては想像遊びや役割遊びなどがある

---

† iseki@ninjal.ac.jp

が、本研究では大戸（1997）による「子どもが見たり聞いたり経験した事象を、表情、身振りを使って役割を取り、あるいは身の回りのいろいろな物を見立てるなどして一つの一貫したテーマに組み立てていく象徴的な遊び」に該当する遊びを分析対象として扱うこととする。本研究が観察対象としたデータの中に見られた例としては、ままごと、お店屋さんごっこ、学校ごっこ（教師と生徒ごっこ）、プリンセスごっこ、おかあさんごっこ（子どもの世話ごっこ）などが挙げられる。

この遊びの中では、現実世界で経験されたものを模倣し、遊びの中に取り込むことが行われる。いまこの眼前にないものを再現することは、認知的に発達した状態でなければ行うことができないことから（松原 2022）、ごっこ遊びは子どもの発達の目安を示すものの一つとして位置づけられ、かつ、発達そのものを促すものでもあるとされる（多田ほか 2009）。加えて、子ども個々人の中で完結する能力だけでなく、他者とともにやり取りし、遊びをつくり上げていくことを可能にする社会的発達も必要とされる。子どもの遊びについて考察を加えたガーヴェイ（Gawey1977）は、誰かとともにごっこ遊びをするためには、子どもは自分が誰で、今どこにおり、何をしており、ある物が何を表わしているかなどといった様々な状況を示す手段を必要とし、これらのことを参与者とやり取りし合うごっこ遊びは、社会的なコミュニケーションに関する課題に取り組むものであるとしている。

そしてこのような機会における養育者や保育者の子どもへの関わり合いが、ごっこ遊びのあり方に影響を与えるとされる。ふりの出現には大人からの働きかけが重要であるといった指摘や（Gawey1977）、ふり行為とふり行為を結びつけていく能力の獲得に際しては、養育者の支えがこの背景にあるといった指摘などがなされている（McCune2008, 小山 2012）。保育者のごっこ遊びへの関わり合いに焦点をあてた高濱は（1993）は、保育者のごっこ遊びにどのように関わり、どのような影響を及ぼしていくのかを明らかにする必要があること、また介入を控えることだけではなく、介入のきっかけをいかに適切に捉えるか、そして介入の内容を子どもにいかに適合させるかについて重要視している。本研究では、この介入のきっかけやその結果生じるごっこ遊びの展開に注目し、ごっこ遊びのやり取りについて記述を行う。当該場面の状況に応じて養育者はどのような関与を行い、それはなにを可能にしているのか、そして子どもと養育者の間でやり取りが相互行為的にどのように組み立てられていくのかについて焦点をあて観察を行っていく。

### 3. データ

以下で見えていくデータは、国立国語研究所で構築を進めている子どもや子どもに関わる人々の言語的・非言語的振る舞いの記録・分析のための資料『子ども版日本語日常会話コーパス』（小磯ほか 2024）に格納予定のデータから抽出した。このコーパスは調査協力世帯の子どもが、両親や祖父母、友人たちなどといった普段関わりのある人々と交わしているコミュニケーションの様子を、ビデオカメラおよび IC レコーダーを用い定期的に収録することによって得られたデータからなる。このうち本研究では、養育者の補助がごっこ遊びの実施に対して影響する度合いが大きいと予想される、象徴的なふり遊びが生じ始める時期とされる 2 歳 6 ヶ月頃（麻生 1996）から、明確なごっこ遊びを楽しむようになるとされる 4 歳頃（多田ほか 2009）までを分析対象時期の目安とした。この時期の音声・映像データを確認し、調査協力世帯の子どもたちがごっこ遊びを行っており、そこに養育者が関わる部分について、実際のやり取りがどのように子どもに、そして養育者に経験されているのかについて詳細に見ていく。やり取りに参加する子どもの月齢については、各事例を取り上げる際

に示す。

#### 4. ごっこ遊びの展開に関する援助の提供

はじめに見る事例 1 では、兄妹がごっこ遊びをして遊んでいる。これを見守る母親が妹あやね（2歳8ヶ月）に対し援助を加える様子を見ていきたい。ここでは魚釣りに見立てて魚のおもちゃを持ち上げる遊びが行われている。抜粋の前では、兄そう（5歳8ヶ月）がよろめくふりをしながら魚のおもちゃを持ち上げ、「よし釣れた」と魚釣りの達成を宣言する。続けて、これを串に刺して食べるふりを行っていた。そして、この様子を見ていた妹に魚を釣ってみよう勧め、魚の釣り方（魚のおもちゃの持ち方）を説明する。以下の抜粋はこれに従って妹のあやねが魚を釣り上げている（魚のおもちゃを持つ）場面である。

[事例 1] ジュージューしたら (Y009\_041a)

1. (あやねが魚の人形を両手で持つ)
2. 母: あらできたできた.あやちゃん釣れた.お魚.
3. (1.0)
4. 母: すごいじゃん.
5. あやね: (イッテ)((魚をもって前方に向かって数歩歩く))
6. (1.4)((そうが走り去る))
7. 母: あやちゃん火でジュー[ジューしたら?
8. あやね: [(アゲヨ)
9. 母: 火でジュージュー.((そうがあやねのもとに近寄る))
10. そう: はっ.
11. 母: ジュージュー(.)焼いたら?
12. そう: あここで.ここで焼いて.((床を手で軽く叩く))
13. あやね: ジュージュージュージュー.

まず、あやねが行った魚のおもちゃを持つという振る舞いは、それ単独では魚釣りとしては認識しにくいものであった。母親はここで「釣れた.お魚」(2行目)と言語化することによって、あやねの今行った振る舞いを「魚釣り」として受容している。加えて、「できたできた」(2行目)、「すごいじゃん」(4行目)という肯定的評価によって、現在が魚釣りごっここの「魚を釣り上げることに成功した」局面であることをハイライトしている。

この様子を見ていたそう(兄)は、突然あやねに背を向け勢いよく走り去っていき、あやねの様子から目を離す。一方のあやねは魚を持ったまま数歩前に進み何らかの発話をしているが、これが特定のふりやその準備であるのか否かについては判断ができない。このような魚釣りごっこの展開が停滞し得る状況で、母は「火でジュージューしたら?火でジュージュー」「ジュージュー焼いたら?」(7,9行目)と魚の調理を促す。ままごとはあやねが普段から経験し、慣れているごっこ遊びの一つであった。この一部である調理という活動を、魚釣りの中心的な活動である「魚を釣る」局面を終えた後に続け得る活動の選択肢として提示することによって、あやねが現在の魚釣りごっこにままごとを接続し、ごっこ遊びの継続が可能なるよう母親は補助している。

兄は母の発話の途中であやねのもとに近寄り、母親の調理の促しに付け加えるように調理を行う場所の指示を与え、母の促しに同意している。そして、あやねは母と兄の勧めに応じ、釣った魚のおもちゃを焼くふりを行う。

以上の事例 1 では、妹のあやねが兄そうの振る舞いを真似することで開始した魚釣りご

っこに対し、母親がどのような関わりを行っているのかを見た。妹に先立って魚釣りを行った兄は「おとととと」「よし釣れた」といった発話や、大げさによるめくとといった身体的振る舞いによって釣りの局面を明示していた。これに対し妹は、自身が魚釣りのふりをする間、発話を行っていない。この釣りのふりは魚をあっさりと両手で持つ形で行われていたため、兄のようなふりや発話がなければ、その局面が見えにくいものであった。母親はここで、妹が魚を持つ様子が魚釣りに見立てたものであることや、魚釣りの局面について、実況や評価によって受け入れ、またこの場にそのことを明示的に提示している。加えて、途中で生じた遊びの展開の滞りに対しては、魚釣りの展開の一部として適当であり、かつ妹の持つままごとの経験を用いることができる「魚を焼く」という活動を提示することで、ごっこ遊びの展開を促し、妹から魚を調理するふりを引き出している。

## 5. ごっこ遊びの開始に関する援助の提供

次に見る事例2は、養育者の声掛けがごっこ遊びの開始を促す例である。3歳8ヶ月のりんなは、祖母に買ってもらったばかりのファストフードの形を模した組み立て式おもちゃを一人で組み立てて遊んでいる。同じ机には向かい側に母親、そして隣に弟（はると、0歳11ヶ月）を抱きかかえた祖母が座っている。母親と祖母はおしゃべりをしており、祖母は時折抱きかかえた弟の様子に応じて話しかけるといった相手をする。

以下の抜粋の中では、りんなが一人で黙々と行っていたおもちゃの組み立て遊びが、祖母と母親の振る舞いをきっかけにお店屋さんごっことして展開し始める。これがどのように生じているのかについて見てみたい。抜粋の直前で、りんなはおもちゃを組み立てる手を止めたまま無言になり、しばらくそのままの状態だった。

[事例2] お店屋さんが始まったよ (Y005\_021a)

1. はると:      ば:ば. ((指をたてて手を上下させる))
2. 祖母:      は:い.どれ?
3. 祖母:      わ::お\* 店 屋 さ ん \*が始+まっ [たよ::?]
4. 母:      [すいませ:ん.ピザください.い.]  
祖母      \*りんなの腕を揺する\*  
りんな      +ハンバーガーのおもちゃを組み立てる>>
5. 祖母:      わたし [はハン]バーク:. .
6. りんな:      [は:い.]
7. りんな:      は:い.
8.      (0.6)
9. りんな:      お客さんがいっぱい来ますね.
10. 母:      大変ですね:.

抜粋の冒頭、手が止まった状態のりんなの隣で、弟はるとは喃語とともに一本の指を立てて上下させる。祖母はこの様子を、祖母自身を呼びながら（「ばあば」(1行目)）何らかのものを指し示す振る舞いとして扱い、呼びかけに応じながら何を指し示しているのかに注意を向ける。注目したいのは続く3行目の祖母の発話である。祖母はこの指差しをりんなを指すものとして扱い、そしてそのりんなの方向を見た結果として「お店屋さんが始まった」事に今気づいたことを歓声（「わ::」）とともに弟に知らせている。実際には、祖母のこの発話はりんなのおもちゃの組み立てに先んじてなされており、祖母はこの発話の途中でりんなの止まった状態の腕を揺すっている。この振る舞いは、りんなにおもちゃの組み立ての再

開を促し、そしてそれがお店屋さんの振る舞いにあたるものであると意味づけるものとして観察される。そのため、りんながお店屋さんごっこを開始することを暗に促す振る舞いであるといえる。実際にりんなはこの直後、促しに応じてハンバーガー型のおもちゃの組み立てを開始する。

祖母の発話が終わらないうちに、母親もこのごっこ遊びの促しに加わる。祖母の発話は役としてではない、遊びフレームの外側 (Sawyer1997) からのものであったのに対し、やり取りに加わってきた母の発話は客という役としてのものであり、突然お店屋さんごっこのフレーム内に入り込んでいる点が特徴的である。母親はまだごっこ遊びの開始が明示されていないこのタイミングで、店員の注意を引き注文を行う際の定型的表現を用いた「すみませ:ん.ピザください:い。」(4行目)と発話することで、客として注文行動を行う。祖母もこれに続けて「わたしはハンバーグ」(5行目)と注文を連ねる。りんなはそれぞれの注文を受け入れ(「は:い。」(6,7行目)、かつ「お客さんがいっぱい来ますね。」(9行目)と発話していることから、母親と祖母がお客さん役であり、同時に自身は客からの注文対応と調理を担う店員役であることを理解し、そしてその役に沿って振る舞っていることがわかる。

以上ではお店屋さんごっこの開始を祖母と母親がどのように促し、子どもがそれを受け入れ、ごっこ遊びの開始が実現したのかを見た。祖母はあたかもすでにお店屋さんごっこが開始しているかのように振る舞うことでりんなにごっこ遊び開始の可能性を示し、促している。母親はこの祖母の促しに加勢するように、ごっこ遊びの役に入り込み、客として振る舞うことでりんなの店員としての振る舞いを引き出す。このように、場面の特徴を持たなかったりんなによるおもちゃの組み立てという一人遊びは、祖母と母親の促しをきっかけとし、りんな自身がこれに振る舞いを噛み合わせることによって、ファストフード店という文脈を獲得し、ごっこ遊びとしての展開が実現している。

## 6. ごっこ遊びの展開に利用可能な積極的なアドリブの提示

先に見た二つの事例は、ごっこ遊びの対象となっている場面に典型的な展開(魚を釣り、それを調理して食べる(事例1)、店員が調理を行っている際に客から注文が入り、それを受け入れ、続く調理を行う(事例2))を導入できるよう、明示的・暗示的に養育者が子どもに向けて働きかけるものであった。次に取り上げるのは、単調に繰り返されていた展開の中に、異なる展開のきっかけを養育者が創造的に提示し、働きかける例である。事例3で行われているのはお店屋さんごっこで、参加しているのはゆうな(3歳8ヶ月)と祖母である。二人は抜粋以前で、店員と客の役割を入れ替えたり、店種を変更したりといった変化を加えはするものの、遊びの展開としては「商品の希望を言う」「商品を受け渡す」「支払いをする」ことを繰り返していた。そんな中で生じた事例3では、ゆうなが店員をする八百屋に、客である祖母が夕飯の材料を買いにやって来ている。

[事例3] 塩もみ (Y001\_063)

1. 祖母: じゃあとね:ナスと,(1.0)ナスとキュウリの塩もみしたいんですけど.=
2. ゆうな: =はい.=
3. 祖母: =ナス半分でいいです.
4. (1.0)
5. 祖母: キュウリも半分でいいです.
6. ゆうな: ° これでしゅか?° ((祖母におもちゃを差し出す))
7. 祖母: はい.そうです.お皿に入れてください.

8. (3.4) ((祖母がゆうなにおもちゃを返す))
9. 祖母: はい.
10. (1.4)
11. 祖母: ナスとキュウリの塩もみは(.)お店屋さんで作ってくれてますか?
12. ゆうな: ちゅくってれています.
13. 祖母: はいじゃあ作ったのください.い:い?作ったの:.
14. ゆうな: これは[ちゅくってないんでしゅ.
15. 祖母: [塩-
16. 祖母: じゃあ作って.塩もみぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅって.
17. (0.8)
18. ゆうな: やるですよ:.
19. 祖母: はい.やってください:い.((ゆうながおもちゃを箱に入れる))
20. 祖母: あ.いいねいいね:.
21. (0.8)
22. 祖母: うん.それをボウルでぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅって.いいね:.
23. ゆうな: ( )
24. 祖母: うん.
25. ((13秒省略 ボウルに見立てた箱が祖母から見えるかゆうなが尋ねる))
26. ゆうな: 塩もみぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ((自作の塩もみの歌を歌いながら箱の中身をもむ))

前半で行われていたのは、これまで二人が行ってきたお店屋さんごっこと同じく、客が欲しいものを言い、それを受け渡すというやり取りであった(1-9行目)。この展開に祖母が変化を加え始めるのが11行目、野菜の塩もみという調理のサービス(あるいは調理した商品の販売)が行われているかを店員であるゆうなに尋ねる発話である。ゆうなはそれが行われていると返答し(12行目)、祖母はこれを受けて塩もみの行われた野菜を要求(13行目)、ひいては塩もみという調理の作業を今行うよう促す(16行目)。ゆうなはこの塩もみを十分に理解している様子であり、ボウルに見立てた箱に野菜を入れ、慣れた様子で塩もみの歌を歌いながらもむ動作を繰り返すことで祖母の促しに応じた(19行目以降)。

祖母は物の売買のやり取りの繰り返しという単調なごっこ遊びの中に、新たに調理の要素を組み込むきっかけを導入し、ゆうなから調理のふりを引き出すことによってお店屋さんごっこの展開に変化を加えている。塩もみというメニューは普段の生活の中で子どもがすでに経験しており、そして楽しくできる可能性に志向して祖母が選択したものであろうことが、歌を歌いながら手を動かすというゆうなの塩もみの様子(26行目)から予想される。

## 7. 考察

以上では、子どものごっこ遊びに養育者がどのように関与し得るのか、その具体的なやり取りについて三つの事例を見てきた。養育者がごっこ遊びに関与し行っていたことの一つ目としては、子どもによって今何がごっこ遊びの中で行われているのかを見えやすい形にすることが挙げられる。3歳児のごっこ遊びに対する保育者の関わり方について分析した多田ほか(2009)は、保育者がごっこ遊びでどのような役割を担っているのかについて、一つに、子どもたちが重視していた見立てについて、これを受容し共有する役割を挙げている。ここでの保育者はごっこ遊びの中で、「子どもの作った料理を食べる人」などといった与え

られた役に沿った振る舞いをするをとおして、料理に見立てた実際のモノ（「砂を詰めた容器」など）をそれとして受容し、話の展開にヒントを与えていると指摘している。本研究で見た事例でもこの見立てやふりの受容が行われており、一方でその方法は多田ほか（2009）とは異なる、遊びの観察者としてふりを言語化するという方法が用いられていた。子どもの身体的振る舞いだけでは何が行われているのか共有されにくい状況において、養育者は「釣れた。お魚。」（事例1）や「お店屋さんが始まったよ。」（事例2）といった発話をその動きに付加することで、その場にいる他者にこの見立てやふりが何なのか、そしてごっこ遊びがどのような局面にあるのかをハイライトし、話の展開を補助していた。

養育者がごっこ遊びで行っていたことの二つ目に、ごっこ遊びの展開を促すことが挙げられる。この後に何を行うのかについて、続く展開を促す、あるいは引き出すためには、現在の状況や子どもの理解に対する期待に応じて、いくつかの方法が使い分けられていると考えられる。特定の動作に「したら？」「して」などといった表現を付加した提案や依頼は（「火でジュージューしたら？」（事例1）、「塩もみぎゅっぎゅっぎゅっぎゅって）作って。」（事例3）など）、次の振る舞いを具体的にどのように行うのかに関する情報を含んでおり、そしてそれを勧めていることが明示されているため、その場にいる子どもたちにとって理解しやすい直接的な促しであると考えられる。これに対し、事例2の「お店屋さんが始まったよ」のような、養育者の働きかけの結果生じるであろう状況を描写する発話は、促しとしては間接的なやり方であるといえる。これは事例2が弟の指差しをきっかけとし、弟にごっこ遊びの様子を見せるという文脈に埋め込む形で構成された促しであることに起因しているだろう。さらに別の形式としては、ごっこ遊びの中の役として相手に向けて働きかけ、返答を求めるタイプの発話（隣接ペア第一成分, Schegloff & Sacks 1973）を用いる方法が観察された。事例2の客として店員に注文を行う「すいません。ピザください。」や事例3の「（塩もみをして）作ったのください。」などの発話がこれに相当する。事例2を例にとると、この発話がなされる前、子どもはお店屋さんごっこ開始の促しを受けてファストフード型おもちゃの組み立てを開始し始めるが、これだけでは単におもちゃの組み立てを再開したのか、あるいは役になりきって「調理」を開始したのか、判別することができない。ここで養育者が客になりきり注文という行為を行うことによって、子どもは注文を受ける行為を行うことが可能になり、発話をとおして明確に店員として調理していることを表現することが可能になっている。

本研究では、養育者が子どもにどのように働きかけ、子どもがそれをどのように受け止め都度のごっこ遊びの展開を相互行為的に形成していくのか、そのやり取りを記述してきた。養育者は子どもの現在の振る舞いの状況、たとえばごっこ遊びがこの後の展開を見出していないことや、おもちゃを組み立てる手が止まっていること、また同じ場にいるその他の人たちがごっこ遊びにどのように関わっているのかなどといったことを参照しながら、ごっこ遊びの展開に利用可能な資源を差し出すことで、遊びの発展を補助していたといえる。

## 7. おわりに

今回は取り上げなかったものの、データ中には子どもが自らの希望する展開を推し進めたり、参加者に指示を与えたりなどしてごっこ遊びを主導し、養育者がこれに話を合わせることによってやり取りが進行していく様子も多く観察された。本研究ではその中で、養育者がごっこ遊びの展開に動きをつける事例を中心に取り上げてきた。これは子どもの遊びを補助し、より高次のごっこ遊びへの橋渡しを行うという意味ももちろんあるだろう。一方で、

事例 3 のような積極的なアドリブを取り込む事例は、子どものための補助に志向するのみではなく、同時に大人自身の楽しみにつながっているようにも観察された。そこで最後に短く、養育者がアドリブを展開に取り組む事例を一つ取り上げてみたい。

以下の事例 4 は、ごっこ遊びの中で予期せず生じた奇妙な展開を、養育者が主導し文脈の中に取り込む例である。事例 2 と同じファストフード店という設定で、りんなと母親の二人が遊んでいる。以下の抜粋では、客である母親が店員であるりんなに勧められたメニューを食べ終え、会計をしようとしている。

[事例 4] 優しいこのお店の人 (y005\_021b)

1. 母: わあおいしかった.おいくらですか?
2. (1.0)
3. りんな: 2800 円です.=
4. 母: =(h)せんは(h)っぴゃ(h)くえん?
5. りんな: はい.
6. 母: たっ(h)か(h)::い hhh .hh お金がないんですけど:.
7. (0.6)
8. りんな: じゃあ(1.0)あげますね.
9. 母: ↑くれるんですか?
10. りんな: はい.
11. 母: 優し:いこのお店の人.

会計金額を尋ねた母親に対し、りんなは少し考えた上ではっきりとした口調で「2800 円です」と返す (3 行目)。母親はりんなの発話に重なるほどの早いタイミングでこの値段を繰り返し、聞き返している (4 行目)。吹き出しながら、思わず反応したという様子で発話されている。これに対し、りんながすんなりと値段を受け入れている様子が対照的である (5 行目)。母親はさらに笑いを挟みながら 4 行目の態度を継続し、値段に対して「高い」と評価を示す (6 行目)。そして、「お金がないんですけど:。」と支払いが困難であることをこまったような口調に変えてりんなに訴える。

会計金額を客が尋ね、店員が答えるというやり取りは、飲食店のごく一般的な展開と言うことができ、二人はこれを問題なく進行させている。提示された金額はファストフードを少し食べたにしては高いものであったが、商品の値段の相場はこの時期の子どもにはまだ判断が難しく、そしてそれを母親も承知していると思われる。このまま金銭授受のふりに進むこともできる展開で、しかし母親は、思わず返してしまった笑いと驚きの反応をきっかけに、「お金がない」ものとして、客が自らの窮状を店員に訴える形でこれをごっこ遊びの展開に組み込んでいる。ごっこ遊びで用いるお金の配布は、ごっこ遊びの展開の外側で行われる作業として本来位置づけられるだろう。しかしながら、丁寧体を用い、客の役に入ったまま持ち合わせがないことを伝えた母親に、りんなも店員として対処する。この訴えに対するりんなの考えた対応「(お金を) じゃあ(1.0)あげますね。」(8 行目) は、現実には行われ得ない奇妙なものであったが、母親は客としてこの対応に驚きの反応を返しつつ (9 行目)、「優し:い」(11 行目) と評価し店員の行為を受け入れる。

この事例 4 の中で、母親はりんなの振る舞いをきっかけに生じた奇妙な展開に思わず笑ったり、驚いたりしている。そしてこれをごっこ遊びの展開の一つとして取り込み、続く展開を子どもとともに創造的に作り出している。ここでの母親はごっこ遊びの不意に生じる



面白さを楽しんでいるように見える。なおこの抜粋の後では、母がこの奇妙な展開（勧められるがままに食事を注文した結果思わぬ高額料金になり、しかし店員は客に逆にお金をくれたということ）を祖母に語るというやり取りがなされていた。創造性を育む、子どものための遊びの代表であるごっこ遊びについて養育者は子どもに付き合うだけでなく、これを真剣に楽しむという子どものあり方 (McCune2008) とは異なる形で、子どもと自らの創造による産物を楽しんでいるという側面があるのかもしれない。

## 謝 辞

本研究は国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」および科研費 22K13109、23K25327 の成果を報告するものである。

## 文 献

- 麻生武(1996)『ファンタジーと現実』金子書房。
- Garvey, C. (1977). *Play*. Harvard University Press.
- (高橋たまき訳(1980)『「ごっこ」の構造:子どもの遊びの世界』サイエンス社.)
- 石川洋子(2021)「保育者のふり遊びへの関わり:0~2歳児に焦点をあてて」『文教大学 教育学部紀要』55, pp.111-121.
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G. H. (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation*, pp.13-31. Amsterdam: John Benjamins.
- 小磯花絵・石本祐一・居關友里子・江口典子・柏野和佳子・川端良子・田中真理子・田中弥生・西川賢哉(2024)『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版の概要『言語資源ワークショップ発表論文集』.
- 小山正(2012)「初期象徴遊びの発達の意義」『広島大学教育学部 特殊教育学研究』50(4), pp.363-372.
- 小山優子(1998)「遊びのコンテクストとしての幼稚園:ごっこ遊びにおける幼児のコミュニケーション的行動の事例分析を通して」『幼年教育研究年報』20, pp.57-64.
- 松原乃理子・大滝茜・織壁佐和子・富田貴代・深沢佐恵香・森末一代・請川滋大(2022)「「ごっこ遊び」研究の傾向:保育実践を対象とした調査に着目して」『日本女子大学紀要 家政学部』69, pp.1-12.
- McCune, L. (2008). *How children learn to learn language*. Oxford University Press.
- (小山正・坪倉美佳訳(2013)『子どもの言語学習能力:言語獲得の基盤』風間書房.)
- Mondada, L. (2007). Multimodal resources for turn-taking: Pointing and the emergence of possible next speakers. *Discourse Studies*, 9(2), pp.195-226.
- 大戸美也子(1997)「ごっこ遊び」岡田正章ほか編『現代保育用語辞典』pp.155-156, フレーベル館.
- Sawyer, K. (1997). *Pretend Play As Improvisation: Conversation in the Preschool Classroom*. Psychology Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up Closings. *Semiotica* 8(4), pp.289-327.
- 多田幸子・大田紀子・井上聡子・杉村伸一郎(2009)「3歳児における保育者参加型ごっこ遊び:事例分析を通じた保育者の役割の検討」『広島大学教育学部 幼年教育研究年報』31, pp.47-54.
- 高濱裕子(1993)「幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか」『発達心理学

研究』 4(1), pp.51–59.

高橋たまき(1993)『子どものふり遊びの世界:現実世界と想像世界の発達』ブレーン出版.  
ヴィゴツキー, エリ・エス(神谷栄司訳)(1989)「子どもの心理発達における遊びとその役割」『ごっこ遊びの世界: 虚構場面の創造と乳幼児の発達』 pp.2–34, 法政出版.

## 付 録

書き起こしに用いた主要な記号とその意味は以下の通りである。発話は Jefferson (2004)、  
身体的振る舞いについては Mondada (2007) の記号法を参考に一部変更を加えた。

[ ]	括弧内の箇所が同時に発話されている	<u>うん</u>	相対的に大きく・強く発音されている
(あ)	聞き取り不確実	° うん°	相対的に小さく・弱く発音されている
(1.0)	間合い (秒)	>うん<	相対的に速度が速く発話されている
(.)	0.2 秒未満の間合い	<うん>	相対的に速度が遅く発話されている
:	音の引き伸ばし	(( ))	その他注記 (非言語情報、文脈情報など)
.	下降調イントネーションで発話されている	+, *	振る舞いの区切れ目
?	上昇調イントネーションで発話されている	---	振る舞いが継続する
↑	直後に記す音が顕著に高く発音されている	*-->/-->*	振る舞いが後続行の同一記号まで継続する
↓	直後に記す音が顕著に低く発音されている	*-->>	振る舞いが抜粋以降も継続する
さ-	発音が不完全に途切れている	>>--*	振る舞いが抜粋以前から継続している